

アジア太平洋戦争下の中国伝道 ——『怨みを毀つ涙の握手』とその時代——

山口陽一

アジア太平洋戦争の最中にも日本の教会は伝道を続けた。戦時下の伝道とは如何なるものであったか。日本軍の侵攻に伴って行なわれた中国伝道の一端を考察する。

この時期の純福音派を代表する伝道者に土山鐵次がいる。日本自由メソヂスト教会の聖書学者にして伝道者、日本聖化教団成立に際して総理となった人物である。南京大虐殺後の中国に伝道旅行を行なった記録『怨みを毀つ涙の握手』は時代に歓迎された。本稿ではこの書物に注目しながら、きよめの信仰に生きた戦時下の伝道について考えてみたい。

I. 中国伝道の歴史

中国におけるキリスト教伝道の歴史は、唐代（618～907年）の景教（ネストリウス派）に遡る。さらに元代（1271～1368年）にはフランシスコ会モンテ・コルヴィーノ、明代（1368～1644年）後期にはイエズス会のマテオ・リッチ他による宣教がなされ、典礼問題で禁教迫害の始まった1723年にはおよそ300の教会堂と約30万人の信徒がいたと言われる¹。

プロテスタント伝道は1807年、ロバート・モリソンの広州到着に始まる。1842年のアヘン戦争、1856年のアロー号戦争以来、制約が取り払われ、伝道は飛躍的に発展した。1851年、キリスト教を独自の解釈で受け容れた洪秀全の太平天国の騒乱が勃発する。1842年以前にプロテスタントの宣教師は10数人であったが、1889年には約1300人に増加、信徒も1893年には約55,000人に増えた。カトリックは1896年には、宣教師約750人、信徒約53万人を数えるようになっていた。これに伴って反欧米・反キリスト教運動も頻発し、その最大のものとして1900年には義和団事件が起こった。義和団事件で殺害されたのは、カトリックが宣教師約50人、信徒約30,000人、プロテスタントが宣教師約200人、信徒約1900人とされる²。

義和団事件はキリスト教宣教に大きな影響を与える。それまでの伝道のあり方が見直され、事件の賠償金によってイギリスが山西大学を建設するなど教育伝道が重視されるようになった。幾多の殉教は伝道の熱心を呼び起こし、さらに多くの宣教師が派遣されることになる。1920年代の終わりには、プロテスタント宣教師は約6,000人に、1935年の信徒数は512,539人となった³。

II. 日本人による中国伝道

日本人による中国伝道は、満州事変から日中戦争へと戦争の拡大に伴い、にわかに盛んになる。比屋根安定は同時代の史家としてその歴史的背景を次のように語っている。

「最近不幸にして勃発した所謂事変は、幸いにして東亜新秩序の建設といふ曠古の大業に日本をして発起せしむるに至らしめ、最も深い意味に於て親善すべき日本と支那とが、今や共通の大理想の下に提携すべき好機に際するに至った。随て日本の基督教徒が支那へ続々と渡って、支那人のために福音

139頁。矢沢利彦『中国とキリスト教』1927年、近藤出版社

² 吉田前掲論文、158頁

³ 同右、163頁

¹ 吉田寅「中国」『アジア・キリスト教の歴史』1991年、日本基督教団出版局、

を宣伝し、更に福音を實行して、此誓願を以て一生貫き、其屍を馬革に包み其骨を彼土に埋める事は、日本基督教徒に課されたる天来の使命である」⁴。

満州事変以前の中国伝道の先駆は、日本基督教会伝道局の要請に応じて、1903年に天津、さらに保定に遣わされ3年半の伝道にあたった丸山傳太郎である。天津には、やがて満州伝道会を起こす陸軍主計少将日疋信亮がいた。清水安三は1917年に奉天に赴き、1919年には北京において飢餓救済及び被災児童の収容施設を始め、朝陽門外に崇禎学園を創立して教育伝道にあたっていた⁵。1917年以来上海で内山書店を経営した内山完造は、中国人を愛し魯迅を友とした忘れがたいキリスト者である⁶。

日疋により1933年に設立された満州伝道会は、日本人による中国伝道の中心的な活動であり、日中戦争の勃発と共に東亜伝道会となる。本部を富士見町教会に置き、山本忠興が副会長、松山常次郎が理事長を務めた⁷。1940年に77箇所の伝道地、75名の伝道者を擁していた。会の方針に従い、伝道者の3分の2は満州人、中国人であった。満州に関しては、賀川豊彦の提案で1940年から入植事業を開始した「満州基督教開拓村」の実態が、近年明らかにされ始めている⁸。

1937年、支那基督教連盟の招請を受けた日本基督教連盟は、連盟長千葉勇五郎、総務部長小崎弘道、委員河井道子、総幹事海老沢亮を日支修交使節として派遣した。日中戦争が勃発すると、日本基督教連盟は基督教聯合時局奉仕委員会を組織し、各教派が一致協力して、「皇軍慰問袋献納、前線慰問使

の派遣、国際輿論の是正等」にあたった。中国における防共と人々の敵愾心を和らげる宣撫工作にキリスト教として協力する宣撫伝道である。現地宗教工作のため、北支軍報道部に安村三郎、南京地方に木村清松、古屋孫次郎、中澤豊兵衛、前田彦一、斎田晃、志村卯三郎、蘇州地方には河合堯三、平田甫、清水久男、丹陽地方に寺尾章二、杭州地方には畑中岩雄、堺直武、小山寅之助、北支方面に伊藤榮一、村上治、川端忠治郎、蒙疆方面に小川秀一が派遣され日本人による中国伝道の開拓に従事した。前線慰問のための天津憩の家には1938年12月までに約10万人の将兵が訪れ、北京の医療セトルメント愛隣館は中国人のための医療活動を行なった⁹。日本基督教青年会同盟は1941年6月時点で、北京に奈良伝、南京には安村三郎と井口保男、広東に久芳昇、上海駐在員に末包敏夫を派遣していた¹⁰。1939年12月には27の日本人教会と4つの社会事業団体が連盟を結成する。その理事長は北京日本基督教会の村上治、理事に北京日本人教会の清水安三、北京聖教会の成澤牧師、北京自由メソヂスト教会の織田金雄、天津メソヂスト教会の井上牧師が立てられている。比屋根は、特筆すべきこととして1939年2月に神道、仏教、キリスト教による中支宗教大同連盟が結成され、東亜新秩序の建設に宗教者として協力したことを上げている。同連盟は本部を上海に置き、総裁は近衛文麿、副総裁大谷光瑞、そして小林誠が基督教部長、斎田晃が同主事を務め、キリスト教側が総長を務めたこともある¹¹。

中国伝道について記された書物も数多く出版されるようになる。1939年には、田川大吉郎「支那の新勢」・前島潔「支那の基督教」・高島平三郎「支那の民族性」の三論文が教文館の「時の論叢書」(第二輯)として、同年には、ラトゥレットのThe Chinese, their History and Culture (1934年)の翻訳『支那の歴史と文化』(生活社)が出ている。すでに引用した比屋根安定の『支那基督教史』も同年の発行である。満州生まれの竹森満佐一の『満州基督教史話』(1940年、新生堂)、清水安三の『朝陽門外』(1940年、朝日新聞社)、

⁹ 海老沢亮『国民精神総動員宗教運動資料(第一輯)興亜の使命と基督教』1939年、日本基督教連盟、45頁

¹⁰ 日本基督教青年会同盟『大陸事業の一ヶ年一昭和十五年度報告一』

¹¹ 比屋根前掲書、320頁

⁴ 比屋根安定『支那基督教史』1940年、生活社、310頁

⁵ 清水安三は戦後、桜美林学園を創設する教育者。自伝に『石ころの生涯一崇貞・桜美林物語』1977年、キリスト新聞社がある。崇貞学園をめぐる人物群像は、山崎朋子『朝陽門外の虹』2003年、岩波書店に詳しく描かれている。

⁶ 内山完造『そんへえ・おおへえー上海生活三十五年』1949年、岩波書店の他多数の著書があり、評伝として、吉田曠二『魯迅の友内山完造の肖像 上海内山書店の老板』1994年、新教出版社がある。

⁷ 満州伝道会に関しては、熱河会『荒野をゆく 熱河・蒙古宣教史』1967年、未来社以来、様々な証言があり、まとまった研究としては韓哲曦『日本の満州支配と満州伝道会』1999年、日本基督教団出版局がある。

⁸ 賀川豊彦記念松沢資料館『改訂版満州基督教開拓村と賀川豊彦』2007年

カトリックでは鷲山第三郎の『支那天主公会の実情』（1941年、福村書店）がある。熱河宣教に献身する沢崎堅造の『東亜政策と支那宗教問題』（1942年、長崎書店）はクリスチャン経済学者の力作である。同じく経済学者ヒューズの『The Invasion of China by the Western World』（1937年）は当時の中国学者魚返善雄により『西洋文化の支那侵略史』（1944年、大阪屋号書店）として出版された。中国への関心が高まり、キリスト教の国策協力が叫ばれる中、土山鐵次の『怨みを毀つ涙の握手』は1939年3月の初版以来1940年9月までに5版を重ねている。

Ⅲ. 純福音派のリバイバルと土山鐵次

土山鐵次は1885（明治18）年10月、熊本県玉名郡滑石村小浜に生まれた。日露戦争の勝利に国中が騒然となっている頃、熊本中学を卒業し、1906（明治39）年上京。北米において成功した親戚の帰朝談に発奮し一獲千金を夢見て渡米、ロサンゼルス郊外の義兄三原茂数の農場に寄寓した。本人によれば、物質万能と拝金主義のアメリカに失望し、人生の目的や死後の問題に懊悩する日々を過ごす。キリスト教には偏見による憎悪があり、仏教に望みを託すが、学べば学ぶほど心は暗くなり失望は増すばかりだった。悲壮な覚悟で読み始めた聖書の「人の生くるはパンのみに由るにあらず、神の口より出づる凡ての言による」ということばに光明を見出し、「人の子の来れるも事へらるゝ為にあらず、却って事ふる事をなし、又多くの人の贖いとして己が生命を与へん為なり」ということばにキリストの生涯の目的を知った。「口には精神教育、祖国のため、など大言壮語してはるるが、心の底では名誉心や利己心に満ち満ちてゐる自分の姿が示され、人生の目的は自己のために生くるのではなく、神と人のために生くるにある」と確信した。しかし、決してキリスト信者になってはならないとの母の誠めを思つて一ヶ月ほど悩んだ末、「何が真の親孝行か？ それは真の道に従うことだ」と決心し、次の日曜の夕拝で会衆の真ん中に立ち、信仰を告白した。後年、土山はその回心の顛末を回顧して言っている。「あゝその瞬間、私の心の苦悶と懷疑とは一切取り去られ救いの確信と歓喜が満ち溢れました。明治四十一年四月十二日午後八

時半、罪人なる私は罪赦され神の子とせられました。爾来三十四年の今日に至るまで主は常に私を助け導いてくださいました」¹²。

その後、苦学してハイスクールを終え、会衆派のポモナ大学に入学したものの、その世俗的な雰囲気には飽き足らず、新設間もないパサディナのナザレン大学に転じた。ここで土山はリバイバルに遭遇し生涯の献身を誓う。この時以来、What Jesus would do? が彼の信仰的判断の基準となった。先輩に渡辺善太、同期に喜田川広がいた。その後、土山は平出慶一を頼ってメソジストのドルー神学校に移り、さらに4年の神学課程を学ぶ。特にギリシャ語に秀で卒業時には奨学資金を受賞した。これによりヨーロッパ留学の道が開かれたが、彼は一刻も早く同胞に福音を伝える道を選び、さらに一番条件の悪い小教派の自由メソジストに属することを選択、1915年に按手を受けて帰国した。滞米13年の後、大阪の河辺貞吉に迎えられ、その場で紹介された滝口鶴子と結婚する。日本橋教会と日本自由メソジストの神学校である大阪伝道学館、ここが土山の働く場となる。幾つかの机が並べられただけの日本家屋、「祈ることと道を伝えること」だけを目的に設立されたこの家塾は、児童伝道者西阪保治、聖書学者馬場嘉市などを輩出していた。土山校長の下に新たな塾生たちが集まり始め、土山はたまたま来日した北米自由メソジストの伝道局長を説き伏せ、旧校地を売り払い阿倍野区丸山通りの松林1,300坪を購入。新築4棟、旧屋3棟の日本自由メソジスト神学校が建設された。こうした手腕は伝道面でも遺憾なく発揮され、彼の提案は年会を動かし、天下茶屋、阿倍野、築港、東淀川、神戸の教会が生まれた。さらに西阪保治と共に幼児教育にも熱意を燃やし、1926年の年会では幼稚園事業が開始される。

1927（大正2）年4月、自由メソジスト総会に日本代議員として渡米した土山は、プリンストン大学にコロサイ書の研究の論文を提出、修士の学位を

¹² 「入信の顛末 われらの総理土山鐵次師に聴く」『世の光』1941（昭和16）年9月1日、第180号。土山の入信の顛末は、この記事による。金田数男『世紀の伝道者土山博士の面影』1956年、愛信出版社によると、メキシコ人と喧嘩になりピストルを発砲した。大事に至らなかったものの、このことで悩んでいるときに永松氏に信仰を勧められた。

取得し、エルサレムを經由して 1929 年 2 月に帰国した。土山を待っていたのは東京聖書学院に始まり、当時の純福音派諸派内に広がったリバイバルである。土山はその立役者の一人となり、「主の来たり給う日を速かならしめるため、聖徒の数をみませ」と叫んだ。

1930 年 10 月、全国リバイバル大会が、日本伝道隊の御牧碩太郎、ホーリネスの中田重治、日本自由メソヂストの土山の呼びかけにより東京聖書学院において開催された。米田勇はその日の様子を次のように伝えている。

「土山校長が祈られる。一句一句の合間にアーメンの声が会衆より叫ばれる。手を拍って祈祷が共鳴せられる。それがだんだん強くなって土山兄弟のあの大きな声が講壇にいても聞こえない。続いて彼方からも此方からも力を込めた祈祷が出る。未だ終わらぬ中に祈り出す。二、三人いっしょに祈り出して暫くして気づいて一人がやめる。立って祈る。手を挙げて祈る。拳を固めた両手をもって空を撃って祈る。遂に司会者の言なきに全会衆一緒に祈り出してしまった。何様祈りたくて祈りたくて仕方のない人ばかりゆえ、祈祷の声が大河の決する勢いにてまことにすさまじい」¹³

こうした純福音と自覚する教派の盛んな状況は中国においても見られ、前島潔は 1937 年の各教派の統計表を掲げた後で、後発ながら伝道が盛大で優勢なグループとして自由メソヂストやナザレンを挙げている¹⁴。

土山はバサディナのナザレン大学から博士号を贈られ、馬場嘉市や西阪保治等と袂をわかった後の日本自由メソヂストを保守的信仰により立て直す働きに邁進する。そして、リバイバルはホーリネス分裂の 1934 年まで続いた。

1935 年、土山が 3 度目の渡米から帰るころには、中国における戦火が拡大しており、次章で扱う彼の中国伝道が開始されることになる。1940（昭和 15）年 11 月 17 日、日本自由メソヂスト教会は、日本ナザレン教会、日本同盟基督協会、世界宣教団と合同し、日本聖化教団が成立した。日本自由メソヂストの総理であった土山は、日本聖化教団総理および教務院総長となっ

た。1944 年 4 月、天津教会の講壇において脳溢血で倒れ、日本に戻った。1945 年 6 月 15 日の空襲で、彼が心血を注いだ神学校は塵芥に帰し、敗戦翌年の 1946 年 3 月 14 日召天した（60 歳）¹⁵。

IV. 『怨みを毀つ涙の握手』

日中戦争下の 1938（昭和 13）年、土山は事变下の使命感を次のように語っている。

「事変は愈々進展するのであつた、涙なくしては読むことの出来ぬ皇軍犠牲の数々が報道される、此の犠牲を無駄にしてはならぬ。銃後にある私達も最善の方法を尽して進撃せねばならぬ。黒鉄の武器は手に持たない私達ではあっても、私達のみ持つ武器を持って、第一線に進み行きたい、そして支那人の基督教会を訪れ、又第三国人たる宣教師に親しく会って我が帝国の使命の真意を語って了解を与へ、真の日支親善を計り度い、之は私達基督信者を除いては、他の何者も到底なし得ぬ大きな貢献であると共に第三国に対する善き証であると思ふに至った」¹⁶

慰問伝道を決意した土山を派遣するにあたり日本自由メソヂスト教会の全教役者 30 人は有馬の山にこもり四日間の特別祈祷会を行なう。「三日三夜、祈り抜いた一同の上に、聖霊の大傾注があり、一人として恵にもるゝ者も無く、霊的大革命は私達の上に始まったのである。ここにリバイバルの大爆発となり、火は焰々と全フリーメソヂストに延焼した。この事件は、私の支那旅行記を記す前に必ず特記しなくてはならぬ事である」¹⁷。

10 月 30 日大阪を出発した土山は 11 月 1 日釜山に上陸、プリンストンの

¹⁵ 家庭的には鴿子夫人との間に、長男牧羔、長女緑につづき、二男牧羊、三男牧群、二女みぎわ、四男牧民、五男牧人を授かった。その鴿子夫人を 1932（昭和 7）年に亡くし、1936 年に鳥井欽子と再婚した。以上、金田数男前掲書による。

¹⁶ 土山鐵次『怨みを毀つ涙の握手～事变下大陸慰問伝道記、改訂・増補戦下に於ける宣教開始篇』1940 年（第 5 版）、日本自由メソヂスト教会出版部、2～3 頁

¹⁷ 土山前掲書、6 頁

¹³ ホーリネス・バンド昭和キリスト教弾圧史刊行会編『ホーリネス・バンドの軌跡 リバイバルとキリスト教弾圧』1983 年、新教出版社、32～33 頁

¹⁴ 前島潔「支那の基督教」『時の論叢書第二輯』1939 年、教文館、131 頁

同窓生宋牧師他の歓迎を受けた。その日のうちに京城に着き朝鮮聖潔教会聖書学院に迎えられ朝鮮人のための集会を開くと4~500名が集まった。「如何に彼等が福音に恵まれてゐるかを思ふて、誠に羨望に堪へぬものがあつた」。5日、奉天に至り聖教会の村上牧師に迎えらる。各地の牧師、古清水(大連)、吉田(遼陽)、河野(鞍山)、原田(撫順)が集まる。7日には古清水万太郎牧師が同行して新京へ、ここでも聖教会(三笠牧師)に滞在した。9日ハルピンの聖教会(吉澤牧師)まで行き、引き返して天津に到着したのが11日、いよいよ目的の旅が始まったが、天津の聖經神学院では飛び込みの奉仕を認められず、まずは北京に行く。日本人教会の伊藤牧師、朝陽門外の崇貞学園で20年来の教育を続ける清水安三園長を訪ねた。東洋宣教会の聖書学院では4~50名の支那人学生が硬い表情で迎えたが、説教により「彼らの態度は全く溶かされ砕かれた。最後の祈りの時にはシクシクとすすり泣く声があちらこちらから聞こえて来た」。天津に戻り聖經神学院を再訪するが、宣教師はよい返事をしない。そこに既知のトロキセル理事長からの手紙が届き、18日、70名ほどの教職員・学生を前に礼拝で語る機会が与えられた。

『私は日本人達の熱い祈りのうちに此処へ来たのです』と語り出した。そして、その会衆は次第次第に神の恵みに溶かされ初めて来た、その変化の様子が講壇の上から窺へるのである。一時間経って、ベルが鳴った。しかし、私は時間に頓着なく、どんどん話を進めて行った、恵みは注がれてゆくのである、あちら、こちらで、しくしく泣いてゐるのが見える。『日本人は皆様の為に祈っています、皆様の為に、心からの献物をしたのです。今は試練の時であるが東洋の救のために手を取り合つて行きませう。日本の聖徒達はあなた方の為に祈つてゐるのです』と十字架による愛を高調しながら遂に三時間余を語った。そして最後に『祈ろう』と言つた時、あゝ、あの時の光景は何とも言い現し方がない！。ワーッと深刻な叫び声を立て、泣き倒れてしまつたのであつた¹⁸

そして「怨みを毀つ涙の握手」となる。

19日、済南への車中、宣撫官となつて任地に向かう元済南きよめ教会の

速水福音使と出会い、土山牧師は「氏が真に恵みに充ち、愛の宣撫をせられるやうに祈つて止まなかつた」。21日、泰山をながめ曲阜の孔子廟を自警団に守られて訪ね、兗州を経て徐州に至る。ここまで南下してきた土山はここから西に進み、26日、自由メソヂストの宣教地開封で旧知の宣教師たちの歓迎を受ける。だが激戦地の反日感情は厳しい。

「話し終へた時、六十にもなる極めて貧しさうな老婆が、纏足した小さな足でチョコチョコと講壇に上つて来る、何かしきりに話してゐる、通訳を通して聞けば『私の兄弟の四人は殺され、家は焼かれ私は貧しい一人ぼつちになつてしまひました。然し日本の聖徒達は、私達をも愛して祈つてゐてくれるのですか、そしてこんな奥地にまで、危険を冒して態々訪ねて下さるのですか、こんなに慰めて頂いて本当に嬉しいです、有難うございます。私はもう、日本の軍隊を怨みません、私は日本人を愛します』と言つて泣き出した」
少々長くなるがもう少し引用を続ける。

「すると梁牧師を始め約三百名の全会衆老若男女、子供に到るまでワッと声を挙げて泣く、西村君と私も講壇で思はず声をあげて泣いてゐるのである。現実に父を失ひ、財を失ひ、様々の戦禍を蒙り乍らもあらゆる悲惨事と怨讐とを越えて、全会衆を圧倒する聖愛の支配に、未だ嘗て経験し得なかつた莊嚴な情景を示し、深く感動したのである。更に二三の支那人信徒が立つて、交々、今や私達は凡ゆる怨みと争ひを外にし、日本及び日本人等を愛すると語り初めて、私共もいよいよ感涙に咽ぶのであつた」¹⁹

10月2日、再び徐州まで戻り、さらにそこからは軍用列車で南下して南京に至る。「南京に第一歩を踏み入れた者は先づもつて周囲九里半もある城壁の偉觀に接して、驚くのである。皇軍はよくも之を占拠したものだ」と涙ぐましい忠勇武烈さに感極まるものがある」

その後、上海、青島を回り、済南からは往路を辿り、天津、北京、大連、京城を経由して12月23日、釜山から帰国した。

¹⁸ 土山前掲書、36~37頁

¹⁹ 土山前掲書、80頁

V. 戦下に於ける宣教開始

帰国した土山は、1939年の新年を期して中国伝道の急務を説いて回る。「第一支那伝道旅行は余自身の信仰生涯にも、また吾等の教団に取っても一大転換の時であった」と言う通り、十字架の愛こそは東亜和平建設の真の鍵であるとの訴えに呼応して宣教の熱が燃え上がり、3月9日、日本自由メソヂスト年会は、織田金雄を天津に派遣し支那伝道の開始を決議した。3月25日には『涙の握手』が出版される。ところが、織田が自由メソヂスト総会出席のため渡米中、天津ではナザレン教会の加来国生が伝道を開始したため、土山は7月1日から13日まで再度中国を訪れ、天津に代わる伝道地に北京を選定した。聖教会の成澤牧師との協力が図られた。10月、神学校における宣教リバイバル関西大会では国内外の伝道に30余人が献身、1,250円の中国宣教費が捧げられた²⁰。

12月5日、土山は三度目の中国伝道に出発した。今回はパサディナ同窓のナザレン教会の喜田川広が同行した。加来牧師のいる天津から、織田金雄の赴任した北京へ、さらに保定、石家荘、彰徳を経て島村牧師のいる新郷に到り、北京、天津に戻って徳県へ。ここには日本伝道隊の出身で聖書学舎長沢村五郎の祈りにより前年3月に遣わされた石村伝道師がいた。彼は3つの門のある間口6間、奥行20間ほどの屋敷を特務部から提供されていた。没収した敵産を、「日本にある基督者が何とか支那の為に尽し度いと願って居ます。私もその赤誠に感激するのでかゝる働きの根拠となる家が欲しいのです」と頼み込んで譲り受けたものであった。12月7日戦死した宣撫官・山東特務機関連絡員、横見豊の葬儀は、12月29日に済南最初の基督教式特務機関連葬として行なわれ、織田が説教した。

これより先、24日と25日、自由メソヂスト北京教会の伝道会及び開設式が行なわれ多数の子供と大人が集まった。織田は報告して言う。「信者ではない未信者の支那人が敵国人たる日本人に聞くのだ、アー若し之が我等と反対だったらと土山師も幾度かもらされた」。こうして第三次の伝道旅行を終えた

土山は29日に帰国した。翌1940(昭和15)年9月5日、「戦下に於ける宣教開始篇」を増補し改訂された『怨みを毀つ涙の握手』出版、10日、20日に第4版5版と版を重ね、英文翻訳もなされてアメリカの信徒たちにもたらされた。

1940(昭和15)年10月17日、皇紀二千六百年奉祝全国基督教信徒大会は教会合同を宣言、自由メソヂスト教会は、ナザレン教会、日本同盟基督協会、世界宣教団と合同し日本聖化教団が設立され、翌年4月17日創立総会を開催、土山は総理に就任した。

聖化教団の機関紙となった日本自由メソヂストの『聖化』は『怨みを毀つ涙の握手』への反響を掲載している。そこでは宮中顧問官佐藤恒丸、侍従次長甘露寺受長、陸軍大将山田乙三、海軍少将奥信一、文部省教学局指導部長近藤寿治、朝鮮総督南次郎、支那派遣軍参謀総長板垣征四郎、大政翼賛会事務総長有馬頼寧他からの謝状が紹介され、「この外数百通何れも知有名士の方々より礼状が届いている」と報じている²¹。このように相当な数の贈呈が行なわれ、各界の意に沿うものとして好評を博したのである。『怨みを毀つ涙の握手』は、敵性宗教と批判されたキリスト教の、国策貢献の証しであった。それが功を奏し、同書は版を重ね改訂増補され、さらに中国訪問で米国宣教師たちの理解を得られたことから「国際輿論の是正」のために英訳も出版されたのである。

その頃、北京に派遣された織田金雄は一心に伝道していた。「時に中国人の伝道師が、時に二橋牧師が支那語で、時に私が英語や日本語で通訳つきで街頭青天井の広場に汗と涙を流しつつ支那の民衆に熱叫し基督の十字架を説く姿をご想像ください」²²。織田は教会の設立式から8ヶ月後の1940年9月に7名、12月に8名の受洗者を得て、ますます伝道に邁進した。11月末に北京市内で日本人が銃殺され、すべての城門が閉じられた時、西の阜成門

²¹ 「東亜共栄圏を根深く培かふものは？聖愛の涙である」『聖化』1941年3月1日。他には、宮内省外事課長水野恭介、青島学院商業学校吉利平次郎、文部省図書局長松尾長造、大政翼賛会顧問風見章、同幹事大口喜六からの謝状が紹介されている。

²² 北支教区長織田金雄「北京伝道一ヶ年の聖戦記」『聖化』1941年7月1日

²⁰ 当時、巡査の初任給は月給で45円。

近くの教会付近には、帰宅できない人々があふれた。織田は収容できる限り人々を教会に受け入れ世話をした。

土山が切り拓き織田が継承した日本自由メソヂストの中国伝道は、その後、日本聖化教団から日本基督教団第八部に引き継がれた。日本聖化教団が成立すると早速行なわれた合同記念協同伝道は、伝道に専心する同派の面目躍如たるところである。日本自由メソヂストは織田に加え、始興教会に林つた、前田千代を、ナザレン教会は天津教会に加来国生を送っていた²³。また日本同盟基督協会の生越實造は、東亜伝道会から南京に、さらに上海に派遣された。生越はそこで病により夫人と長男を失っている²⁴。

VI. 聖化と宣撫

土山が天津において「怨みを毀つ涙の握手」を体験したあの伝道旅行の後、天津聖經神学院のジョージ・ジェ・モーは、「知らずして天の使いを」という一文を同派の機関紙に寄せ、次のように語った。長くなるが全文を引用する。

「年老いたるアブラハムは知らずして天の使いをもてなした。丁度一月ばかり前に私共はそれと同じ事をしたのである。度々私共が大した期待もかけない時に、思はざる人や事柄を通して全く考へもしなかつた大きな恵みを得るものであるが、最近土山牧師がほんの数日我らの聖經学院を訪問された場合がそれだったのである。土山牧師は日本自由メソヂスト教会の総部長であって、吾教団の宣教師数名は彼の教会で日本通過の際に説教をして居る。即ちトロキセル師は二年前のリバイバル大会で一週間の御用に当り、ツラクセル夫人は昨年九月に御用に当って居られる。そして、昨年ツラクセル夫人が訴へたのは天津に在住する四万の日本人に対する伝道の急務とその重荷であったが、その結果同教会では土山師をしてこの慰問旅行をせしむるに決したとの事である。実に多くの献物がこの旅行の為に献げられて居る。同師は

朝鮮、満州を経て遂に当地天津に到着されたのであるが、その滞在中、我らの宣教師一同は彼と食を共にする特権を得、また確かにこの事によってお互いの友情を深め得た事を確信する次第である。然し、実は同師は我が聖經神学院で御自分の證詞をなさる為に招かれておいでになったのであった。けれども常識から考へて多少の不安もあり、どうかとも考へないではなかつた。何故ならば、会衆の中には様々の戦禍に遭遇してゐる者が居ったからである。

実に我らは、恐れを以てうち慄へつゝ集会を始めた。然し土山師は且つて米国に学ばれし事として極めて明快な英語を以て話され、私はその通訳の御用に当つたのである。実に豊かなる主の助けがそこに注がれ、話が戦争の事に及んだ時再三再四会衆は泣きくづれてしまった。在支三十四年の間、この様に支那人の会衆が泣き崩れた事を私は未だかつて見た事がない。集会は二時間以上に及んだ。

この集会の結んだ実の一つとして一青年は度々求めて得られなかつた聖潔の経験を得、他を赦す事の出来なかつた一物から完全に救われたと言つてゐる。この集会に於て彼は證して『私は土山先生のお話を承つてゐる間に心の中にある堅き一物、即ち赦す事の出来ない心があつて、これが長い間聖潔の妨げをしてゐた事が判つて来ました。然し、今は實際の愛を以て支那の兄弟達を愛すると同様に日本人を愛しクリスチャンを愛すると同様に未信者をも愛する事が出来ます』と述べた。

尚土山師は又、その愛の印として金百円也を天津の福音宣伝の為に贈られたのである。かく彼の證詞によって多くの者が恵まれたのである。彼こそは実に吾らが知らずしてもてなした天使であつた²⁵

アメリカ人宣教師の「三十四年間で初めて」という言葉から、土山の説教が如何に中国の人々の心を打つものであつたかがわかる。敵を憎むのでなく赦すことで聖潔を得たという証もまた偽りのないものに違いない。ここには間違いなく極みまで純化された聖化の体験がある。しかし、その善意と信仰の関係が、これ以上を望めないほど有効な宣撫工作ともなつていたのである。

²³ 「日本聖化基督教団教会一覧」 榎原正人編『日本同盟基督協会略史』2007年、447～448頁

²⁴ 比屋根前掲書、321頁。榎原前掲書、341頁

²⁵ 土山前掲書、128～129頁。ナショナル・ホーリネス・ミッション発行コール・ツー・プレイヤー誌より。

我々はこれをどう考えるべきであろうか。皇軍と大東亜共栄圏に対する批判力を持ち得なかったことは致命的であるし、そこまで国家と一体化してしまう体質は、純福音の神学の課題でもあろう。純情な信徒たちの聖化体験は、敵味方の関係が取り払われた「神の国」の片鱗を体験することではあった。しかし、それはあまりにも時代状況と乖離し、神の正義とも隔絶したものであった。殺す側にいて赦しを語ることへの躊躇は、土山にもあった。これを大東亜戦争への疑いに向けることがなぜできなかったのだろう。

終わりに

土山は中国に行かない方がよかったのだろうか。苦悩に喘ぐ人びとを想像し、祈っていればよかったのだろうか。戦時下の中国に危険を冒して伝道に行かなければ受けなかったであろう批判を、その同情と献身ゆえに受けることは気の毒なことである。だが、中国の人々がそう言って赦すことはあっても、日本の教会がこれをよしとすることは許されない。本稿では、土山鐵次や織田金雄という伝道者の純粋な信仰に敬意を覚えつつ、これを批判的に考察した。私たちは、彼らが残してくれた歴史を無駄にしてはいけない。現代においても戦争が伝道を破壊していることを知る我らは、『怨みを毀つ涙の握手』を、伝道に生きた先達の教訓として心に刻みたい。

戦後六十年を経た今、戦時下の純福音派の伝道を検証し、歴史的研究を蓄積する必要を覚えてこの小論を執筆した。

(東京基督神学校・校長)